

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 19 日現在

機関番号：32689

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2013～2014

課題番号：25884065

研究課題名(和文) 7 - 11世紀の西域北道におけるトカラ仏教文化の継承に関する研究：誓願図を中心に

研究課題名(英文) The Succession of Tocharian Buddhist Culture in Northern Silk Rout between 7th to 11th Century: Examining the Development of Pranidhi Paintings

研究代表者

森 美智代 (Mori, Michiyo)

早稲田大学・文学学術院・助手

研究者番号：00706658

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、西域北道のクチャ・カラシャール・トルファン地域周辺の石窟に見られる誓願図とその関連作例に関するデータを収集し、主題内容、意味機能、年代の考察を行った。とりわけ、トルファン地域のウイグル時代仏教美術を代表する大画面誓願図の形式に注目し、そのプロトタイプと目されるクチャ地域の作例について重点的に検討した。その結果、大画面誓願図の形式は遅くとも7世紀までにクチャの中心柱窟の後廊において出現していたこと、初期には誓願図以外の主題と一連のものとしてあらわされ、「再生の記説」としての側面が重視されていたことを明らかにし、ウイグル時代に定型化されていく過程を跡づけた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to correct the data related to the so-called Pranidhi paintings in the Northern Silk Route (oases of Kucha, Karashar and Turfan) and to clarify their themes, religious functions as well as proposing the more reliable chronology. I focused on a group of mural paintings in Kucha area which were suppose to be the prototype of the monumental and the most representative Pranidhi Paintings of the Uygur caves in Turfan. Based on the above investigations, it is clarified that the format of monumental Pranidhi paintings appeared in the rear corridor of the central pillar caves in Kucha before 7th century; in the early stage they were painted together with the non-Pranidhi themes as the good examples of the "prophecy on the rebirth" and later had changed its meaning and stylized in Uygur era.

研究分野：美術史

キーワード：美術史 石窟壁画 仏伝 誓願図 西域北道 トカラ仏教 ウイグル仏教 授記

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 7世紀以前の西域北道においては、インド・ヨーロッパ語系のトカラ語使用者による説一切有部系の部派仏教(以下、トカラ仏教とよぶ)が主流であったが、7世紀末以降に唐の直接支配が及ぶと漢人仏教が流入し、さらに八世紀半ば以降にウイグル人が遷ってきたために言語・文化のチュルク(トルコ)化が引き起こされ、トカラ系・中国系の仏教を共に吸収したウイグル仏教が起こる。初期のウイグル仏教はとりわけトカラ仏教の強い影響下にあったと考えられており、7~11世紀の西域北道仏教は、トカラ仏教からウイグル仏教への継承を軸に展開していったといえる。その展開を考察する上で、文字史料の欠落を補う手がかりになり得るものとして、同時期の石窟壁画等の造形資料、わけても「誓願図」とよばれる壁画主題に注目した。

(2) 誓願図は長らく、ウイグル時代・トルファン地域に特有の壁画主題と考えられてきたが、近年、ウイグル期以前のクチャで既にこの画題が制作されていたことがピノー、シュミット等のトカラ語学者による壁画銘文の解読や、ドイツの美術史研究者コンチャックによる壁画主題の同定を通じて明らかになった。これらの壁画が従来、誓願図と結びつけられてこなかったのは、壁画の構成や形式が、トルファン・ウイグル時代の定型化した大画面誓願図とは大きく異なる見かけをもっていたからであり、大画面誓願図の形式がどのように成立したかは不明であった。筆者はクチャ石窟におけるフィールドワークを通してトルファンの誓願図と形式や窟内の壁画プログラムにおける位置が類似する作例を幾つか発見した。これらは従来、単に「立仏の列」とよばれ、保存状態が悪いため十分に観察されず、説話画的要素が看過されてきていた。そこで、これらクチャの作例のデータを公開すること、またこれらが果たして誓願図であるのかを考察し、さらにこの類の作例をトカラ仏教美術からウイグル仏教美術への展開の中に跡づけることが期待されていた。

## 2. 研究の目的

本研究は7~11世紀までの「誓願図」の変遷、ひいては西域北道美術の変遷を跡付け、トカラ仏教からウイグル仏教へ何がどのように継承され、また何が継承されなかったのか、具体的様相を明らかにすることを目的とした。具体的には、以下の二つの課題に取り組んだ。

(1) 基礎的な作業として、まずクチャ・トルファン・カラシャール地域における誓願図関連データを集成し、それぞれの主題内容、宗教的機能(壁画プログラムにおける位置づけ)を明らかにする。

(2) 誓願図の絶対年代を解明する手がかりとなる壁画や題記などの資料を収集し、西域

北道における誓願図の展開の諸段階を跡づける。

## 3. 研究の方法

美術史的観点から、誓願図とその関連作例を対象に調査・研究を行った。

(1) かつてクチャ地域の諸石窟の調査で得た「立仏の列像」等の誓願図関連作例のデータについて、整理して線図を制作し、今後の研究の基礎資料とする。

(2) 調査対象について、当初は新疆ウイグル自治区クチャ地域の諸石窟における石窟の再調査とカラシャール地域における遺跡視察を予定していたが、現地の政情が不安定であり、長期にわたる実質的な調査(調査対象の石窟はいずれも拠点の町から離れており、近隣のウイグル人村落を拠点に動く必要がある)の実施が困難であることから、下記のとおり、中国国外に所蔵される関連作例や他地域の関連作例の新規調査に切り替えた。

研究初年度である2013年度にはインドのニューデリー国立博物館においてトルファン・ウイグル時代の誓願図とその関連作例の調査を行うとともに、石窟を中心としたインドの仏教遺跡を調査。2014年度8月にはベルリン・アジア美術館および、エルミタージュ・アムステルダム美術館においてトルファン・クチャ地域の誓願図と関連作例を調査。

2014年度3月に、中国甘粛省の石窟調査を行った。同地域は西域に隣接し、西域仏教文化の影響が濃厚にみとめられるゆえである。とりわけ、西域と甘粛西部が中原から孤立した8世紀末以降、ウイグル時代までの作例を中心にして調査を行った。

なお、以上 ~ の調査にあたっては、公刊されている図版では確認しえない細部の図像や様式的特徴の観察に重点をおいた。関連作例については、壁画年代の指標になり得る様式的特徴を抽出することに主眼をおいた。

(3) 以上の調査研究によって得られたデータを踏まえ、誓願図とその関連作例の主題内容について、仏典の記述やこれまでに同定されている仏教説話図と照らし合わせて同定を試みた。また、誓願図とその関連作例石窟の壁画プログラムにおいて占める位置から、その宗教的機能を考察した。

(4) 同時に、壁画様式・題記などのデータを収集し、文献学的研究の成果を援用して、誓願図と関連作例の絶対年代を推定し、西域北道における誓願図の展開の様相を跡づけることを試みた。

## 4. 研究成果

(1) 以下の内容は既に論文として発表しており、その概要をまとめたものである(文献)。かつてクチャ石窟の現地調査を通じて得た「立仏の列像」に関するデータを整理、分析した。上述のように、これらの作例は保存状態が悪く、中心柱窟とよばれる石窟形式の狭

隘な後廊部分に位置することから、従来大部分の作例について図版が公刊されていなかった。そこで、これらの作例の線図を作成し、ディスクリプションを付して発表し、これを一般に参照できるようにした。

・クチャの「立仏の列像」について仏典の記述やこれまでに主題が同定されている作例と照らし合わせて主題の同定を試みた。その結果、6世紀に遡ると考えられる最も早期の作例（キジル石窟第163窟側廊外側壁）には誓願図の主題とともに、明らかに誓願図ではない主題（髑髏バラモン）も含まれていることが明らかになった。すなわち、トルファン・ウイグル時代の大画面誓願図は最多で15主題ほどの連続する誓願図からなる「連作」であるのに対し、クチャの本作例は誓願図の「連作」ではないということになる。

・髑髏バラモンの主題は誓願図ではないものの、「再生の記説（預言）」に関わるという点で、ブッダの未来世における成仏の預言を主題にした誓願図と通じている。さらに、誓願図と関わりが深い（誓願図銘文とパラレルの内容を有する）仏典である『根本説一切有部毘奈耶薬事』には、ブッダ滅後もその遺法を奉じる（或いはブッダの形像を供養する）ならば、その人は死後天界に生まれ、その後涅槃に入ることができると述べている。このような考え方に基づいて、キジル石窟第163窟においては「再生の記説」に関わる主題が中心柱窟後廊の涅槃サイクルの中に導入されるに至ったと考察した。

・キジル第163窟に遅れる「立仏の列像」の作例の主題を検討したところ、現存する壁画全ての主題を明らかにすることはできなかったが、キジル石窟第100窟については誓願図に同定できる内容を新たに加えることができた。またクチャのウイグル時代に降る可能性があるマザバハ石窟第8窟の例については、画面中央の過去仏が特異な飾られた姿にあらわされる点がトルファン・ウイグル時代大画面誓願図と共通することを示した。

・これまでイネス・コンチャック氏等により、誓願図と同様の主題がクチャ中心柱窟の天井画に見出せることが指摘されてきたが、今回、「立仏の列像」も中心柱窟天井画と共通の主題を含むことが確認された。中心柱窟天井は小画面に区画し、一つの石窟内に時に80以上にのぼる説話画を描いており、このうちブッダや仏弟子の「再生の記説」に関わる主題が選択され、大画面化して後廊空間に描かれたものが「立仏の列像」であり、それが誓願図の連作へと展開していったと考える。このように当初の目的どおり、大画面誓願図の起源と展開の様相を跡づけることができた。

(2) 新規調査を通じて得られた主な成果は以下のとおりである。

・トカラ語銘文を伴う誓願図の作例であるベルリン・アジア美術館所蔵クチャ・シムシム石窟第40窟壁画の年代について、ドイツの

研究者は銘文書体の分析から7世紀（唐の西域直接支配の前）と考えてきたが、中国の研究者はクチャ現地に残る壁画の様式的分析からこれをウイグル時代に降るという見解を示している（文献 ）。今回の調査を通じて、同壁画中の樹木の描法、建築の床部分に見られる雷文の形式が8世紀以前には遡り得ないこと、仏の光背に見られる文様がトルファン・ウイグル時代の作例と類似することが明らかになった。したがって、同作例は7世紀の制作ではあり得ず、クチャのウイグル時代に位置づけるのが妥当と考える。

・エルミターージュ美術館所蔵、クチャ将来と伝える誓願図作例の年代は、従来、7-8世紀と見なされてきたが、今回の調査を通じて如来の地髪部がトルファン・ウイグル時代の誓願図と同様の独特な形にあらわされていることがわかった。ここから、同作例がウイグル時代に降る可能性も考慮される。

(3) シムシム石窟第40窟、エルミターージュ所蔵クチャ将来誓願図はともに一見、トカラ仏教美術様式の延長上にあるようにみえる作例が、仔細に観察すると、盛期のトカラ仏教美術にはなくトルファン・ウイグル時代の作例にある表現がみとめられる。このような壁画はチャ石窟に他にも存在しており、ウイグル時代かそれにやや先行する時期の貴重な壁画作例と考えられるため、その抽出・グルーピングを行った。

(4) 上記のシムシム石窟第40窟誓願図は、一々の主題の銘文中に *vyākaraṇa*（授記）の語が必ず用いられることが特徴となっている。この場合は授記とは、過去仏がブッダの前身に対して言明した将来成仏の預言を指す。いうまでもなく、授記は絵画化することが不可能であり、また誓願図銘文の中には「授記」の語が一切見えないものもあるが、従来の研究では、授記が一貫して誓願図の主要なテーマであると考えられてきた。しかし、シムシム第40窟銘文がウイグル時代に降るものであり、なおかつ上記の(1)に述べた大画面誓願図形式が「再生の記説」に関わる一連の壁画に起源をもつことを考慮するならば、誓願図制作の背景に必ずしも一貫して授記思想があったわけではなく、中途から授記が重視されるようになったと推測される。すなわち、6・7世紀から11世紀に至る長い期間に、誓願図の意味機能が固定されていたのではなく、揺れ幅をもって展開していったと考えられる。これは誓願図の定義に関わる重要かつ根本的な問題であるが、これについては上の(2)の内容とともに現在論文を執筆中である（『アジア仏教美術論集』中央アジア巻、中央公論美術出版に掲載予定）。

(5) 本研究の終了後に誓願図と関連作例の主題同定に有効な新資料が発表された。

Karashima and Vorobyova-Desyatovskaya, *The Avadāna Anthology from Merv, Turkmenistan*, in; *The St. Petersburg Sanskrit Fragments*, Tokyo, 2015.

また、クムトラ石窟第 34 窟誓願図に付されるトカラ語銘文の全面的な解読結果も近く発表される予定である（慶昭蓉&趙莉、西域文史、2015 年 7 月発行予定）。

メルヴ本は説一切有部における転生に関わる思想の展開を考える上で重要な文献である。またクムトラ第 34 窟は最も多くの小画面誓願図が描かれる石窟であり、同窟銘文の研究は誓願図の主題同定や、銘文と壁画の関係について豊富な手がかりを提供することが期待され、今後もこれらの成果を援用して研究を継続したい。

#### 参考文献

下記 5 . の発表論文（森美智代 2015）

賈応逸、森木塞姆石窟概述、森木塞姆石窟内容総録、亀茲石窟研究所、2007 年、pp.8-25.

#### 5 . 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 1 件)

森美智代、亀茲石窟の「立仏の列像」と誓願図について、佛教藝術 340 号、査読有、2015 年、pp. 9-35

〔学会発表〕(計 1 件)

森美智代、亀茲石窟における誓願図の展開、2014 年度第 3 回中央アジア科研全体研究会、龍谷大学大宮学舎、2015 年 2 月 21 日

〔図書〕(計 2 件)

森美智代 他、てらゆきめぐれ、中央公論美術出版、査読無、2013 年

森美智代 他、仏教文明と世俗秩序、勉強出版、2015 年、査読無、pp.261-289.

#### 6 . 研究組織

##### (1)研究代表者

森 美智代 (MORI, Michiyo)

早稲田大学・文学学術院・助手

研究者番号：